

風を起こす

<第39回>

知識+チャレンジ精神で
協働のまちづくり御嵩町生涯学習課文化振興係係長
みたけちょう

栗谷本 真さん

訪日外国人の増加に伴って、各自治体では観光資源の開発整備が進められている。彼らに選ばれる観光地となるためには、まず、そこに暮らす人々が、地域の歴史や文化を知り、その魅力を発見する必要がある。

中山道の街並みを蘇らせよう！

江戸時代後期、大ベストセラーとなった『東海道中膝栗毛』の続編『続膝栗毛』は、五街道の一つ、中山道が舞台となっている。江戸・日本橋から東海道と合流する近江国・草津までの507・7kmには67の宿場があったが、人々の移動手段が大きく変わったことで、次第に姿を消していった。妻籠や馬籠など観光資源として活用されているところはあるものの、その数はそれほど多くない。そんな中、かつての街並みを住民たちの手で蘇らせようとしたのが、岐阜県御嵩町である。町には御嶽宿と伏見宿の2つの宿場が

あったが、往時の面影は失われつつあった。それを少しでも取り戻そうというのだ。

「町では平成18年に第四次総合計画を策定したのですが、その際、中山道って町にとってすごく大事な存在だね」という話が盛り上がりました。400年もの間、町の軸となってきた中山道は地域の資源です。それを生かして個性あるまちづくりを進めていくことが、総合計画に盛り込まれました」

そう話すのは御嵩町生涯学習課文化振興係長の栗谷本真さん。平成8年に学芸員として採用され、町の資料館である「中山道みたけ館」で郷土の文化財や歴史に関わる調査研究、情報発信を続けてきた。

「総合計画では重点プログラムとして、中山



【くりやもと・まこと】昭和45年生まれ。岐阜県中津川市出身。小学生の頃、父と一緒に古代の石鏃（せきぞく）探しに出かけたことがきっかけで歴史に興味を持ち、学芸員を目指した。大学院卒業後、平成8年御嵩町に入庁、町立資料館「中山道みたけ館」の学芸員として従事する。平成20年企画課、平成21年まちづくり課を経て、平成28年より再び「中山道みたけ館」に勤務。右の写真で着用しているジャンパーはペンキが付着しているが、手づくりの景観整備に携わっている間もずっと愛用していた「宝物」。

道の再生が掲げられ、住民参加による「協働」で取り組んでいくことになりました」

約15名の住民から成る「みたけ地域活性化委員会」が立ち上げられ、栗谷本さんはまちづくり担当として平成20年から活動をサポートしている。再生のためのキーワードは「景観づくり」と「にぎわい創出」。景観づくりでは、中山道再生の核となる御嶽宿を中心に整備していくことなど指針が定められた。

手づくりでも、こんなに変わる

「景観整備」となるとお金をかけて…という話になりがちだが、活性化委員会ではアドバイザー役の大学教授の意見を探り入れ、手づくりでチャレンジしていくことになった。

最初に手を着けたのは、御嶽宿地区に設置されたゴミ集積箱。スチール製のゴミ集積箱は堅牢で衛生的ではあるが、古の風情の中にあつては、やはり違和感がある。木造家屋の景観に合わせて、表面に板を貼ることにした。のこぎりで板を切り、ゴミ集積箱の表面を覆うように打ち付けた。仕上げて骨董家具のような焦げ茶色のペンキを塗った。木の素材感に「手づくり」という要素が加わった効果もあるだろう。無機質なゴミ集積箱が温もりを帯びた。

次に目を着けたのは、名古屋鉄道・御嵩駅



無機質なゴミ集積箱の表面に板を貼った



町の玄関口である駅舎も住民の手でリニューアル



ホース格納箱は街並みの色に合わせて化粧直し



街道らしさを盛り上げる「灯籠」を住民たちの手で設置

の駅舎。町の玄関口となる駅にもかわらず、駅舎は色あせていた。所有者である名古屋鉄道の許可を得て、リニューアルすることにした。味気なかった窓枠に格子を付け、景観にふさわしく屋根は焦げ茶色、壁は白、壁面の木組みは空色でペイントした。駅舎の化粧直しにより、駅前の雰囲気まで明るくなった。

「手づくりで、ここまでできるんだ」——手応えを感じた地域活性化委員会のメンバーたちは、公営駐車場のコンクリート塀、橋の欄干…と修景していった。

古の色彩を蘇らせた街並みには、灯籠や犬矢来がよく似合う。県による地域づくりの補助金制度を活用して設置すると、旧街道の趣きが一層増した。

「1つ1つは小さな変化ですが、町ゆく人々から『最近変わったね』という声が聞かれるようになってきました。それが、地域活性化委員会の皆さんのやる気になりました」

手づくりだからこそ得られたこと

御嵩町は岐阜県内でも早い時期に中学校ができた。裁判所や警察署が設置されるなど、地域の中心的な町だった。明治時代に垂炭が発見されると炭鉱の町として栄えたが、昭和40年代に閉山された。現在、自動車関連企業が数社あるものの、人口は平成7年をピークに下降線をたどっている。

活気を失っていく町で、御嶽宿とて当時の面影を残す建物は数軒しかなかった。「こんな状態で何が御嶽宿なの？ 中山道なの？」——住民の空気も大半は冷めていた。「役所が今さら何をするつもり？」と。「手づくり」という手法は、その空気を変えた。

「あまり乗り気じゃなかった方も、実際に手を動かしてやっているうちに、結構楽しくなっていたようです。完成後には達成感

がありますし、自分でやれば愛着も湧いてきます。よく見ると、木の切り口がガタガタだったり、ペンキの色ムラはありますが、それも手づくりの証しです」

「景観」という概念が根ついていない中で始めた景観づくりに不安もあったが、作業を進める過程で、住民自身が町の魅力に気づき、景観に対する認識を深めることができた。大学教授の呼びかけで町外から大学生の参加もあり、世代を超えた交流も生まれた。手づくりを選択したのは町の財政事情もあったが、それ以上に得られたことのほうが大きい。

平成20年から3年間をかけた景観づくりは、一般社団法人日本経営協会の「活力協働まちづくり推進団体表彰」準グランプリと国土交通省の「手づくり郷土賞」を受賞し、更なる自信につながった。

学芸員は雑芸員？

地方自治体ではいまや住民との「協働」はマストになっている。「まちづくりにおける協働は住民が主役」ではあるが、言葉通りの体制づくりは容易ではない。長年、行政任せに慣れてきた地域なら、住民の自立を促すところから始めなければならない。

「今度こんなことをやってみませんか？」と提案しながら、自分はいかに裏方に回って、皆さんたちの気持ちを盛り上げていくか。その雰囲気づくりに気を遣いました」

栗谷本さんにとって地域活性化委員会の

メンバーのほとんどが年上。一言をもった人々による会議は衝突が多く、話が前に進まないことも。多様な意見を一つにまとめていくのは、神経を擦り減らしたのではないかと。

「心がけたのは誠実さです。真剣に取り組む姿勢を伝えるように努めました」

「中山道みたけ館」の開館に伴って入庁した栗谷本さんは、11年間、学芸員として経験を積んできた。学芸員の仕事は、自虐的に「雑芸員」と称されるほど多岐にわたる。「郷土資料の収集・整理・保存に始まり、文化財の調査研究など何でもやります。成果は町の資料館で企画展などとして公開しますが、その展示も自分たちで行います」

意外なところでは、山から下りてきたニホンカモシカが車に轢かれると、その後処理も文化財担当者の仕事だという。ニホンカモシカは文化財保護法で指定された国の特別天然記念物。故に事故死が明確であっても、獣医に診せ死因の詳細を調べた上で埋葬するのだ。

平成20年、栗谷本さんは「企画課」に異動、さらに翌年には新設された「まちづくり課」に配属された。その任務は住民の中に入って町を盛り上げていくこと。学芸員の仕事は基本的に個人の中で完結してきたため、仕事に対するスタンスから大きく変えなければならなかった。とは言っても、学芸員として蓄積してきた町の歴史・文化に関する知識や経験はまちづくりに携わる上で、大きなプラスとなった。専門的見地からの意見には説得力があり、地域資源を活用したまちづくりを進め

ていく大きな動機づけにもなった。

どうやって皆が喜んでくれるだろう

御嵩町では景観づくりと並行し、にぎわい創出の一環として、中山道でのウォーキングイベントも実施している。その名も「御嶽宿往来」。「往来」と書いて「うおーく」と読ませるネーミングは栗谷本さんのアイデアだ。

「御嶽宿から東へ向かう街道は、史跡も多く当時の雰囲気の色濃く残っています。そこを皆さんで歩こうというイベントです」

平成20年、参加者約120名でスタートした「御嶽宿往来」は、平成22年から次の宿場がある瑞浪市と連携し、「中山道往来」として開催している。御嵩町内で完結していた約5kmのコースは11・8kmに延び、参加者1000名規模の一大イベントに成長した。

「どうやって皆が喜んでくれるか、楽しんでくれるか、ゴールを想像しながら考えるのが好きなんです。それも、困難があったほうがより良いものになるし、自分自身も燃えます」

ゴールを想像して成功させた一つが、流しそうめんのギネス記録挑戦だ。「全国豊かな海づくり大会」の岐阜県開催に合わせ、県内の各市町でイベントをすることになった。担当の若手職員として栗谷本さんは「どうせなら面白いことをやろう」と提案したのだ。

「豊かな海を育むのはきれいな川。それをイメージして、流しそうめん」です」

平成22年当時のギネス記録は2340m



「岐阜県内の中山道はある程度知っているものの、県外へ出ると実際どんな状況なのか全く知らないという現状で、できれば当時の旅人の目線で見てきたい」という想いで実現させた中山道の旅。同僚と2人、6泊7日の行程で、中山道の御嶽宿から日本橋まで380kmを無事に走破した。ゴールとなる日本橋で応援者と記念撮影した時は、身体の疲労も忘れて感無量に（写真右から2人目が栗谷本さん）



旧街道を一日中自転車で行き続ける



ただでさえ重量のある電動アシスト自転車に旅の荷物も加わって、重さは倍増。石畳の階段を自転車をかかえて上ったり下りたりするだけでも、かなりの重労働



江戸時代庶民が旅する時に使った『岐菰路安見絵図（きそじあんけんえず）』は、現代で言えばガイドブック。この絵図をもとに、当時と今の変化を確認

だったから、目指すのは2500m。ギネスワールドレコードに申請すると「日本古来の方法で」など細かい条件が提示された。

各課から人員を出してもらい、800本の竹を切り出すところから準備を始め、そうめんが途中で引つかからないよう竹の節をすべてグライNDERで削っていく。土日も休みなしで作業し「開催直前は夢の中で竹星人に追いかけられました」と栗谷本さんは笑うが、提案者の一人として「絶対に失敗できない」というプレッシャーは相当だっただろう。その甲斐あって、平成22年6月、皆が固唾を飲んで見守る中、ギネス記録が達成された。

考えるな。感じる！

「仕事をする上で意識しているのは、与えられた使命の中で、どれだけ面白いアイデアを出し実現させられるかということです。町の宣伝マンのつもりで、皆さんに町の魅力を知り感じてもらうためにチャレンジしていきたい」

昨年10月、御嵩町内の中山道14・5kmのうち3・6kmが国の史跡に指定された。平成8年からの町の取り組みが、20年という年月をかけてようやく実を結んだ。国指定の史跡となれば学芸員の果たすべき役割は増える。

「中山道も地元の人にとっては生活道です。史跡と生活の折り合いを、どこでつけるか。また、道だけでなく景観も併せて残そうとする、土地所有者の賛同が欠かせません。地域の資源を守り後世に伝えていく意義を、

どうやって理解してもらい協力を得ていくか、課題はたくさんあります」

地域の価値を高めるため、何ができるのか。そのヒントはどこにあるのか。

今年6月、栗谷本さんは同僚と2人で御嶽宿から日本橋まで中山道を辿る旅に出た。当時の旅人と同じ徒歩…とはいわずに電動アシスト自転車を使ったが、初日からバッテリーが切れたり、ヒルに襲われたり、弥次さん喜多さん顔負けのアクシデントに見舞われた。「自分の目で見てきた中山道は、本当に美しかった…。沿道の人々の優しさに触れる一方、いかに江戸時代の旅人たちがいろいろな想いを持って旅をしたのか実感できました。この貴重な体験は文化財保存や観光政策の側面から生かしていけるんじゃないかと思っています」

栗谷本さんの好きな言葉は憧れのブルース・リーが『燃えよドラゴン』で放った「Don't think, Feel!」（考えるな。感じる）。「僕は心配性な反面、勢いでやってしまうところがあるのですが、ノリでやることも時には必要なんじゃないかと感じています」

失敗を恐れ考え過ぎて動けなくなるより、神経を研ぎ澄まし、世の中の流れ、周囲の流れを感じ取って果敢にチャレンジしてきたが、それでも「100%満足というのはなくて、もつとやれること、楽しいことがあるんじゃないか。まだまだやりたいことは尽きない」と瞳を輝かせる。その心意気が、これからの町の歴史を刻んでいくことだろう。

（取材／ライター 更田沙良）